

---

# 一枚の楽譜

篠宮 楓

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一枚の楽譜

### 【Nコード】

N3061T

### 【作者名】

篠宮 楓

### 【あらすじ】

深山 沙奈は、二年で初めて同じクラスになった同級生。華奢な身体からは考えられないほど、勢いのある人だと思っ。

一通の手紙、草間視点のお話。

深山に手紙を書くに至った経緯とは……？

「ん？」

次の時間が選択科目の美術ということもあつてクラスメイトと渡り廊下を歩いていたら時、ふと聞こえてきた歌声に足を止めた。女性にしては少し低い、アルトの歌声。綺麗なその声は、耳慣れた合唱曲を一人で歌っている。

「どうした、草間」

一緒に歩いていたはずの俺がついてきていないのに気がついて、顔だけこつちに向けたクラスメイト……石井 和馬……が不思議そうな声を上げた。

けれど俺の視線は、歌声のするほうに向けたままで。

「いや……、この声って……」

その歌を聴いていたくて、最小限の言葉を伝える。

すると石井は少し首を傾げて俺と同じほうに顔を向けたかと思うと、ああ、と何か納得したように頷いた。

「深山が歌ってるんだろ？ あいつ、綺麗な声してるからなあ」「え？」

その言葉に一度石井を見て、すぐに元に戻した。

よく聞けば、確かにクラスメイトである深山さんの声。

けれどあの小さな身体から出る声量とは思えないほど、深く声が広がっている。

「深山、中学の時合唱部にいたし。結構有名だったよ、コンクールでソロとかまかされてさ」

歩き出さない俺に焦れたのか、いつの間にか横に立っていた石井が両腕を組んでふむと息を吐いた。

「そういえば手芸部だよなあ、あいつ。なんで合唱に入らなかったんだろっ?」

「……なんでお前、そんな詳しいんだ?」

「そりゃ、深山と同じ中学だから。っーか遅刻するぞ、早くいかな」と

予鈴が鳴り始めたのを受けて、石井が俺の肩を押した。

丁度歌声もやんだから、固まったように動かなかった俺の足も美術室へと向けて歩き始める。

「深山、選択授業音楽取ってんだな。じゃあ、たまには聴けるなあ。あいつの歌」

嬉しそうに目を細める石井に、俺はひとつ間を置いて話しかけた。

「深山さんのこと、好きなのか?」

「好きだよ?」

即答されて、思わず目を見張る。

石井はそんな俺に少しも気がつかず、美術バッグを持ったままの手を振り回した。

「明るいし、世話好きだし、おおらかだし。たまに脳内トリップしてんのが、可愛いんだよなあ」

「本気で?」

好きという感情をさらりと言われて、反射的に聞き返した。

恥ずかしげもなくそう言える、石井の性格って凄い……。

石井は俺の顔を見ると、ニヤリと口端をあげた。

「妹的な感じで」

「……そういうこと」

「なんだ、あんまりあせらねえな。つまんねえ」

期待はずれのように言われても、こっちは困る。

「焦る理由が、一つもないからね」

そう伝えると石井は、つまんねえなあともう一度呟いてから美術室のドアを開けた。

深山 沙奈は、二年で初めて同じクラスになった同級生。

華奢な身体からは考えられないほど、勢いのある人だと思う。

バレーで物凄いアタックを連発していたのを、一学期の初め体育で見せられた時、隣のコートでバスケットをやっていた男子連中は啞然とした。

よもや、身長そこそこの細い彼女が、そんな事が出来るとは思って  
いなかったのだ。

あれはびっくりした。

うん、思わず目を見張るほど。

本当は

それから、少し、気になっている。

## 2 (前書き)

ちよつと今日は短いです。

「草間くん？」

二学期の初め、始業式と同時に行った席替え。

窓際から二列目、一番後ろの席に荷物を移動させた後。

後もう一つずれていたら窓際だったのに、と少し残念な気持ちになりながら頬杖をつく。

そのままぼうつと窓の方を向いて外を見ていた俺の視界に、入り込んできた姿。

「……深山、さん」

空いていた窓際の席に荷物を置いて俺を見下ろすその人は、深山さんだった。

深山さんは俺を見下ろすと、にっこり笑って椅子に腰を降ろす。

「やったー、隣が草間くんなら、二学期のテスト少しはよくなるかも」

見るからに浮かれている姿に、驚いていた意識を切り替えて頬杖をついたまま目を細める。

「……なんで俺が隣だと、テストがよくなるのかな」

「そんなの、分からないところは強制的に教えてもらうからに決まってるじゃない。ね？ 学年一番の草間くん」

「……古文はダメだよ。俺、苦手なんだ」

「苦手って言う意味、国語辞書で引いてみれば。苦手な人が、学年十位に入るわけじゃないじゃない」

例え、他が全て一位だとしても。

そう呟く深山さんの頬は、ふくつと膨らんでいて。なんだか指で押したくなってくる。

……やったら、怪しい奴か。

衝動を抑えるように、頬杖を解いて椅子の背もたれに体重をかけた。

内心、この席になった事に感謝しながら。

深山 沙奈は、二年で初めて同じクラスになった同級生。  
華奢な身体からは考えられないほど、勢いのある人だと思う。

隣の席になった俺は、理数系の授業が終わる度に教科書片手の深山さんに付き合わされることとなった。

根っからの文系らしく、理数系はダメらしい。

読解の仕方によって幾通りもの答えがある古文や現文より、理数系の方が分かりやすいと思うんだけど。

一度古文の話をしていたとき、源氏物語について脳内トリップを披露された。

一番好きな箇所について、それはもう昼飯時間に延々といつの間にか一緒に昼飯を食っていたことに、周りに言われて気がついた。

深山さんは、恥ずかしそうに笑いながら謝っていたけれど。

俺は時間を把握して、これが石井の言っていた奴かと黙って耳を傾けていた。

だから、謝られるいわれはないわけで。

反対に、こんなに短く感じた昼休憩はなかったわけで。

少しずつ、この感情の名前に気がついてきた。

大体……

他人にあまり興味のない俺が、勉強を教えている事自体、自分でも

驚くべき事だ。

今までも言われた事はあるけれど、了承したことはない。  
けど

眉を顰めて教科書と俺の説明に意識を向ける表情とか、考え込むように指先を軽く曲げて口元に当てる仕草とか……

俺の説明で問いを理解した時に見せる笑顔とか、目を離せない自分がいて。

やっぱり、そうなのかな？ そんな事を思う今日この頃。

「あれ、まだ移動しないのか？ 次、選択授業だけだ」

週に一度の選択授業、適当に取った美術を受けるべく椅子から立ち上がった俺は、いつもならとつくに音楽室へと移動している深山さんが、何か必死に用紙を埋めている姿に首を傾げた。

深山さんは俺の言葉に顔も上げず、シャーペンをかりかりと音をさせながら動かしている。

「んー……、世界史の課題が、もう少しで終わるから……」

集中すると自分の意識を周りと遮断するらしい。

いつもなら顔を上げて笑ってくれるけれど、今は課題で頭が一杯みたいだ。

「手伝おうか？」

「……大丈夫」

それ以上言葉はなく、かえって邪魔かと俺は教室を後にした。

「なんだ、今日は深山、歌ってないのか」

渡り廊下を出たところで、後ろから歩いてきた石井に呼び止められた。

それに顔だけ振り向けると、すぐに歩き出す。

「まだ教室にいた。世界史の課題、やってる」

歩調を緩めずにそのまま特別教室棟に足を踏み入れると、がしつと後ろから肩に腕を回されて上体が前のめりになった。

眉を顰めて横を見ると、そこにはニヤついた表情の石井の顔があった。

美術バッグを持った手を、ぐりぐりと腹に押し付けてくる。

……暑苦しい……

「近いよ」

不機嫌さを隠さない声音で言い放つと、石井はぐつと顔を近づけて目を細めた。

「週一の楽しみが無いからって、不機嫌にならないのぉ」

ふざけた口調にむっとして口を真一文字に結ぶと、おおこわ、とか言いながら石井が離れていく。

「草間って不思議やろーだと思ってたけど、案外単純素直な性格なのねえ」

「その口調、止める。いらつく」

「へいへい」

俺の視線から逃げるように角を曲がっていく石井の背中を睨みつけて、内心息を吐き出した。

……深山さんが移動しないことに、その理由が課題の提出だという事を聞いて、手伝う事でさっさと終わらせて移動してくれないかという気が急いたのは。

深山さんの歌を、聞けないから。

自分の行動と感情に気がついて、空いている手でがしがしと頭をか  
く。

最近、彼女の事を考えすぎな気がする。

無意識下で感情を左右されるなんて、今まで体験した事がないから戸惑う。

はあ、と声に出して溜息をつく、石井の後を追うように美術室へと向かった。

まだ予鈴の鳴っていない室内は、週一、この授業だけ他のクラスと合同になるからか騒がしい。

俺は後ろのドアから入って一番手前に席を取ると、近くで他のクラスの人と話していた石井がその横の机に美術バックを置いた。

「まだ、ご機嫌斜め中？」

ふざけた口調のまま椅子に座る石井を一瞥しながら、Yシャツのポケットから眼鏡を取り出してそれを掛けた。

そこまで悪くない視力は、必要時……要するに授業の時のみ、眼鏡を要する。

授業の準備をしようとバッグを開けた俺は、思わず固まった。

「……またやった」

思わず呟いた言葉に、石井がひょいっと覗き込んできた。

俺の目の前にあるのは。

乱雑に放り込んだとしかいえないような、その中身は。

「なんで美術に硯だよ」

呆れたように呟いたその声に、周りの人達まで覗き込んできた。

「草間くん、またバッグ間違えたの？」

「これで何回目だよ」

面白そうに囁し立てるその声に、まったくだ、と自分で思いながら壁に掛かっている時計に視線を向けた。

もうすぐ予鈴。

全力疾走で自宅まで往復五分と少し。

面倒だけど、仕方ない。

俺は溜息をつく、椅子から腰を上げた。

「取ってくるから、先生に言っというて」

そう言つて石井を見ると、怪訝そうな顔を俺に向けた。

「え？ 待つてりやいつも通り妹ちゃんが来るんじゃないの？」

「来るなら、もう来てるはず」

「……いつもの事だけに、冷静な事で」

だったら間違えなきゃいいのにねえと呆れる石井をそのままに、目の前のドアを開けようと……

ガラッ

……したら、おもいつきり勢いよくそのドアが開いた。

「くさ……、わあっ！」

途端、突入してきた人が体当たりをかましてきて慌てた俺はドア枠を掴んだ。

後ろ向きに倒れたら、絶対に頭を打つ。

頭を打つ自身がある。

運動神経には、まったく自信がないと自信を持って言えるから。

そんなくだらない事を考えながら、ふうと息を吐き出した。

衝撃で眼鏡がずれて、かろうじて耳に引っ掛かっている程度にまで落ちていた。

両手でドア枠を掴んでいて今は直せないから、仕方ない。

体当たりしてきた人は俺の身体で打つたのだから顔を片手で摩りながら、小さく唸っている。

「……えーと、大丈夫？」

体勢を立て直してから少し離れると、その人は鼻を抑えながら顔を上げた。

「……深山、さん」

思わず、目を見開いた。

なんで？ どうしてここに、深山さんが

体当たりされたよりも驚いた俺は、眼鏡を直すことさえ思いつかないままじつと深山さんを見下ろした。

音楽を選択している彼女が、ここにいるわけがない。

なんだ？ 俺の妄想か？ 幻想か？ あつたらいいなが、あつた？

某CM

深山さんはちよつと涙目になりながら、その手に持っていたものを俺に差し出した。

それは……

「佳奈子ちゃんから預かったの。草間くんが教室を出て行った後に来たんだけど、こっちに来る時間が無いって焦ってたから」

……俺の、美術バッグ。

何も答えることができなかった俺は、差し出されたその勢いそのままバッグを受け取る。

「あんまり佳奈子ちゃんに世話掛けちゃダメだよ？ おにーさんなのに」

小さい背を反らすように腰に手を当てると、まるで諭すように右の人差し指を立てた。

「毎日朝にお弁当を届けてもらうだけでもあれなのに、忘れ物まで世話を焼いてもらうおにーさんなんて、ちよつと情けないでしょ。

ね？」

しかも、忘れるのを見越してまだ自宅におにーさんがいるのに持ってくるなんて、と佳奈子を褒め始めた深山さんに後ろから石井が声を掛けた。

「かーさんが、深山ってば」

つらつらと佳奈子について語っていた深山さんは、石井の言葉に眉を顰めて首を傾げる。

「せめて、おねーさん」

「随分ちびこいねーちゃんだな。まあいいや、とりあえずおねーさんや」

「何？」

石井は右腕につけているゴツイ腕時計を目の高さを持ち上げて、左手で指差した。

「もうすぐ授業、始まるけど？」

そのデジタル時計は、もうすぐ授業の始まる時間を表示させていた。いつの間にか、予鈴は鳴り終わっていたらしい。

「……………」

思わず、二人してそれを見つめる。

時間にして数秒。

弾かれたように深山さんが駆け出した。

「え、あ、みや……………」

突然の行動にドア枠に手を置いて廊下に身を乗り出すと、深山さんは廊下の角を曲がる手前でこっちを振り返ると軽く手を挙げた。

「確かに渡したからね！」

そう笑うと、角を曲がって姿が見えなくなった。

聞こえるのは、特別教室棟を出て行く深山さんの足音だけ。

それもすぐに消えて、しんとした廊下に戻る。

半分見えて、半分ばやけている視界に、そういえば眼鏡ずれたんだっけと今更思い至ってその位置を直す。

俺は右手を首の後ろに当てて摩ると、気持ちを落ち着かせながら美術室に顔を向けた。

「……………」

すると一番に視界に入ってきたのは、ニヤニヤと笑う石井の姿で。静まり返っている状況に気がついて辺りを見回すと、クラスの奴らが全員俺を見ていた。

「……何」

深山さんが現れて昂ぶっていた感情が、すうっと通常に戻っていく。俺の言葉にニヤニヤと笑っていた石井が、笑みを深める。

「仲のよろしい事で」

「は？」

仲って……

「忘れ物を届けに来てくれただけだろう？」

勤めて冷静な口調で言葉を返すと、クラスの奴らが一斉にしゃべり出した。

「草間でも、あんな顔するんだなーっ」

「ちよっ、なんかもう、見てて恥ずかしいんだけど！」

「……」

人をネタに盛り上がり始めたクラスを溜息一つで無視を決めて、俺は椅子に腰を降ろした。

広げた書道バッグを片付けて机の脇にかけると、美術の用意を始める。

周りは勝手に盛り上がっているけれど、なんだか反対に覚めてきた俺は、もう一度眼鏡を人差し指で押し上げると、教師が来るまで目を瞑って周りの声を流していた。

……ていうか、あんな顔って、俺、どんな顔、してるんだろ



俺は、朝に弱い。

それは確実に夜型人間だからなのだが。

「何をやってるんだ、佳奈子」

朝HRぎりぎりのタイミングで教室に入ると、なぜか俺の席に妹の佳奈子が座っていた。

しかも横向きに座って、隣の深山さんと話している。

佳奈子は俺の声にびくともせず、顔だけこっちに向けて興味なさそうに再び前に戻した。

反対に深山さんの方が、苦笑している状態だ。

「おはよう、草間くん」

「……おはよ」

なんとなく面白くなくて、机に鞆を置いて佳奈子の頭に手をのせる。ていうか、小さいその頭を掴みあげる。

「あいたたっ」

やっと口を開いた佳奈子は、口を尖らせた。

「毎日毎日お弁当持ってきてあげてる妹に、その態度っては何？

無表情でばけーっとしてさ。だからもてないんだよ」

「……佳奈子」

静かに言い放つと、はいはい、と溜息をつきながら椅子から腰を上げた。

「深山先輩、それじゃ」

「はい、またね」

佳奈子は深山さんに軽く会釈をすると、教室を出て行った。  
俺は横でひらひらと手を振る深山さんに向き直る。

「妹が、迷惑掛けて……」

「妹がって」

俺の言葉を遮るように、深山さんが苦笑気味に口を開く。

「一番迷惑かけてるの、草間くんじゃない」

うぐっ、と気圧されて半目で深山さんを見返す。

「……それ、言う？」

わかってるよ。充分、深山さんに迷惑掛けてる事くらい。

でも勉強みてあげてたりするじゃないか、そりゃこつちも半分は楽しんでるけど。

無表情かもしれないが、今、かなり文句が言いたいんだが。

なんとか押し止めて椅子に腰を下ろすと、意地悪そうな視線とかち合った。

「佳奈子ちゃんに一番迷惑かけてるの、草間くんでしょう」

「……は？」

その主語、深山さんじゃなくて？

思わず絶句しそうになって、誤魔化すように鞆に手を掛ける。

「この席になってどれだけ草間くんが“噂の草間くん”か、ホント実感できたよ」

「噂？」

一時限目の教科書を出しながら、視線は向けずに問い返す。

すると既に準備は終えている深山さんは教科書でばたばたと風を自

分に送りながら、右の人差し指を立てた。

「頭はいいけど、変わってる人」

「……変わっているとは、別に自分では思わないけど」  
が、周りからそう言われているのは知っている。

頭はいいけど、変わってる人。遠くで見たい人。

一体どうということかと、聞く度に思う。

要するに傍にはいたくない、そういうことなのだろうと。

現にクラスでは付き合いのある奴なんて一人か二人程度だし、どちらかといえば部活の仲間の方がよく話すかも知れない。

深山さんは俺の言葉を聞いて、けらけらと笑い出す。

「あれを自覚有りで意識的にしてたら、ホントにおかしな人だよ草  
間くんてば」

「あれ？」

深山さんの会話は主語を抜かしたり指示語だったり、俺にしてみ  
ると何に対して話しているのかわからない事が多い。

まあ、自分自身、あまり他に興味を持っていないから伝わらないだ  
けなのかもしれないが。

「そ。体育の授業に上履きで出たり、美術に書道用具持っていった  
り。それに……」

ぴらり、と二つに折り畳まれた紙を指先で持ち上げた。

「教師から挑戦状貰ったりね」

はい、と差し出されたそれは見なくても分る。

数学教師からの、挑戦状という名の数式問題。

「机に入ってたみたい。さっき、佳奈子ちゃんが見つけて」

その紙を受け取りながら指先で広げると、見覚えのある癖の強い文

字が並んでいた。

「……関数か。脇坂の授業って、今日あったかな」

じっとその問題を見ながら、話を聞いているだろう深山さんに問いかける。

「ん？ 三限目にあるけど、解けるの？」

「解けるかじゃなくて、解く」

どうせ脇坂も、三限目までに解かせるつもりで朝に置いていったのだろうから。

解けていないと分かった時の得意げな顔を見るのは、不愉快だ。

一限目の現国の教科書を机の隅に追いやってシャーペンを手に取ると、詰め込んだ知識をフル回転させる。

少し前にやった院の入試問題に、似たような数式があったな……。そんなことを考えながら、シャーペンを持ち直した。

「でも、噂だけじゃないって、それも分かったけどね」

思考にのめり込もうとしていた俺は、深山さんの声に思わず顔を上げる。

今もし擬音が目で見えるのであれば、いや現実にはそんな事はあるわけもないんだが、俺の頭の上に“がばっ”とか見えそうな感じの反応で。

俺のその態度に驚いたのか少し目を見開いて首を傾げた深山さんは、ゆっくりと眉尻を下げる。

……嫌な気分になんてしてしまったか？

ふと心配になって口を開こうとすると、彼女は片手を上げてごめんと申し訳なさそうに謝った。

「え？」

何を謝られたのか分らず小さく聞き返すと、深山さんは下げている頭を上げる。

「集中力削いじやったよね。さー、頑張れ〜」

「……………ああ」

どう答えればいいのか分からず、曖昧に答えてもう一度数式に目を落とした。

隣から全くわかんないや、と呟く声が聞こえる。

顔を上げず視線だけ向けると、自分の席から俺の手元を覗き込む深山さんの姿が目映る。

再び数式を見ながら、まあ分からないよな、と内心呟いた。

脇坂が置いていったのならば、大学入試か大学院の入試問題から抜粋してきたのだろう。

ふざけてやっているのもあるが、俺が地球惑星科学科のある大学に進路を決めたからというのも理由の一つだろう。

まあ、部活で面白がって問題集を解いていた時、俺の方が点数が上だったのが悔しかったんだろうが。

シャーペンの先で数式の書かれた上を、コンコンと叩く。

自分の集中力は、高いものだと思っている。

いいにつけ悪いにつけ、俺は集中すると周りが見えなくなるくらい思考にとっぷり浸かる。

例えば耳元で声を掛けられても、ほぼ気付かない。

だから、さっきの深山さんの声に気付いたのは、珍しい部類だ。

そして……………

申し訳なさそうに謝る彼女の目に、なぜか嬉しそうな色が垣間見え

たのは……それが脳裏から離れないのは……。  
机を叩いていたシャーペンを口元に持っていつて、周りに聞こえないくらいの溜息を零す。

やっぱり俺は、深山さんに対して特別な感情を持っていると考えられる。

こうやって彼女の事が気になって、問題に集中できないほどに。

## 5 (前書き)

更新お待たせいたしました！  
遅くなってしまって、本当にすみません。

「ねー、おにーちゃん。深山先輩って彼氏いるの？」  
とある日の夕食時、暗黙の了解で決まっている席について箸を手に取った俺に、真向かいに座る佳奈子が問いかけてきた。  
ちなみに大き目の正方形テーブルを使っているうちは、真横に並んで座るようにはなっていない。  
一辺につき一人。

ど真ん中にメインの大皿料理が置かれて、後は各々好きに取る。  
大雑把な母親が、結婚してからずっと続けていることらしい。  
どちらかといえば父親似の俺だが、別に文句はない。  
効率的といえば効率的だ。

佳奈子が好きなものが並んだ時は、多く取っていくから構えねばならないが。  
運動からかけ離れている俺とて、成長期の男子。  
好き嫌いではなく、量は重要。

「聞いている？ おにーちゃんてば」  
不機嫌そうな声に、白米を咀嚼したまま顔を上げる。  
流そうとしているというのに、空気を読まない奴だな。  
佳奈子に聞こえていれば、そっくりそのまま糾弾されそうなので口の中のものを嚥下した後小さく息を吐いた。

「何」

聞きたくもないが、もう一度内容を確認してみる。

俺の聞き間違いじゃなければ……

「だから、深山先輩って彼氏いないのって聞いてんの」  
呆れたような声音に、いささかむっとして眉を顰めた。

「深山さんの恋愛事情など、お前に何の関係がある」

「恋愛事情って、おにーちゃんホント高校生？ 硬いよ、硬すぎるよ」

硬派とか言ってる場合じゃないよ、と余計な言葉をつらつらとぶつけてきた。

硬い……硬い？

俺が？

首をひねると、佳奈子は盛大に溜息をついて口に銜えていた箸を手にとった。

「うちのクラスの子がさ、深山先輩の事好きらしいんだよね。委員会が一緒なんだって」

委員会……、深山さんは確か図書委員……。

風紀委員の自分とは何の接点もない委員会だな……。

じゃあ、佳奈子と同じクラスだという男を見に行くには、不本意だが妹であるこいつを口実に……

「は？」

自分が考えていた思考に、思わず自分で停止をかける。

今、自然に何を考えた？

なぜ、その男を俺が見に行かねばならない。

いや、え？

今まで感じたことのない思考の流れに、思わず動きを止める。

そんな俺の態度をどう解釈したのか分からないが、佳奈子にはやりと口端をあげて食べかけだった食事を一気に口に放り込んだ。

少し苦しそくに胸を叩きながらお茶を飲むと、ごちそうさまと母親に声を掛けて椅子から腰を上げる。

「深山先輩って、人気あるんだよねー。特におにーちゃんの隣の席になつてから」

「え？」

まったくいつものように冷静になりきれない頭のまま佳奈子を見遣れば、にんまりと笑う憎たらしい表情。

「それまでも小さいのにパワフルとか言われて人気あつたのに、おにーちゃんのせいで母性まで発揮してるじゃん？ 特に年下男子からの憧れが集中」

「なっ……」

俺が原因？

そんなに、俺、面倒見てもらってるのか？

呆けたように見ているのが面白かったのか、佳奈子は笑いを堪えながらリビングダイニングから自分の部屋へと階段を上がつていった。

「ぼーっとしていると、他人に盗られちゃうよ」

と、一言俺に言い残して。

「……」

夕食を取って風呂に入った後。

俺は自分の部屋で、机を目の前に椅子に座っていた。

父親がずっと昔に買い与えてくれたデスクセットと本棚は、趣味を同じくする俺にはとても使いやすいものだ。

心底思う、買ったのが母親の趣味じゃなくてよかったと。

花柄・レースびらびらが大好きな母親は、嬉々として佳奈子にそう

いった服や小物を与えるが、当の本人は嫌がっていてほぼ使われていない。  
それを把握しているのだから買わなければいいのにとと思うが、母親は負けずに買ってはたんすの肥やしへと化す。  
母親曰く、趣味らしいが。  
佳奈子に買い与えるのが。  
俺には一生判りそうにもない。

いや、今はそんなことはどうでもいい。

「……」

ぼーっとしていると、他人に盗られちゃうよ

佳奈子の言葉が、脳内から離れない。

深山さんが他の人の面倒を見る。

深山さんが他の人に笑いかける。

深山さんが……

「嫌だ」

ぼつり、と呟く。

二年に上がって深山さんを意識した時から、ずっと心に引っ掛かっていた感情。

きつと、そう。多分、そう。

そうやって他人事のように考えてきたけれど。

はっきりと、自覚した。

俺の今の立ち位置に、他の誰かが存在すると思ったら。

まったく見も知らないその人間に嫉妬心を向けてしまうくらい、俺の心は制御不能になってしまった。

そんな事を聞いてきた……聞かれる立場の佳奈子にまで、八つ当たりをしたくなるほどに。

「深山さんは、俺の隣にいてくれればいい」

他の男じゃなくて。

「俺だけの傍に、いてくれればいいんだ」

深山さんを見無視した、独占欲と言う感情。

俺は、深山さんが、好きだ。

「あ、草間くん。やっと来た」

おはようという挨拶と共に、深山さんがぴらぴらと手を振ってくる。また遅刻ぎりぎりだねといわれながら、いつも通りの時間に自分の席に座った。

今日は一時限目に、古文がある。

一番苦手な科目だ。

一つの言葉に表の意味・裏の意味・またその他の意味があったりして、裏の裏は表なんじゃないか？ とか、ふと思ってしまったらなんだか面倒になってしまった。

伝えたい事を文字にするなら、そのまま書けばいいのに。

「ねーってば、草間くん。聞いてるの？」

考えに耽っていた俺の目の前に、細い指先が入りこんできた。

「え？」

少し驚いて顔を上げると、呆れたような深山さんと目が合う。

「さっきから話しかけてるのに、独り言になっちゃうでしょ？」

少し口を尖らせて、半目で俺を睨む。

……可愛い

思わずそんな単語が浮かび上がったきて、慌てて片手で額を打った。ぺちりと情けない音の後に、深山さんが上げた小さな声に驚かせてしまった事に気付く。

「あ、ごめん。それで、何？」

額に当てた手を外して、何とか口端を上げて笑みを作る。

それを見た深山さんが、もっと驚いたように目を見開いた。

「草間くんが朝から笑ってる……っ」

ちょっと待て、何、その驚くポイント。

面白くない気分が膨れて、両腕を前で組む。

「俺だって、笑うくらいする」

深山さんは掌を顔の前で横に振って、いやいやいやとそれを否定した。

「草間くんが笑うなんて、私数えるくらいしか見たことないよ！

しかも朝になんて皆無だよ。うわー、今日はいい事あるのか悪い事あるのか……」

「失礼な。で、何か用があるんだろ？ 何？」

一時限目は古文だから、勉強を教えて欲しいって事じゃないだろうしな。

深山さんは少しだけ表情を和らげて、えとね、と言葉を続けた。

「佳奈子ちゃんが、昼の休憩時間に、クラスに来てって言ってたから」

「佳奈子の……一年の教室？ なんで？」

佳奈子がこっちに来る事はあっても、俺が行くことはない。

用事も思いつかないし、何の理由があつてそんな面倒な事をしなきゃならない。

なんか用があるなら、夜でもいいだろ？

深山さんは俺の考えに気がついたのか、困ったような表情を浮かべる。

「私も理由知らないからなんともいえないけれど、一応、伝えたらね？ それに、ちゃんと行ってあげた方がいいよ？ いつも来てもらってるんだから」

あ、きつと最後の言葉が本音。

子供を諭すようなその声音に若干落ち込みたくなるのは、昨日気付いた恋心故なのだろう。

そんなことを考えていた俺は、その態度が嫌がっているように見え

ているとは全く気付いていなかった。

小さく息を吐き出す声が聞こえて、顔を上げる。

「そんなに嫌だったら、伝言を頼まれた責任上、一緒について行くから。ここは痛み分けていう事で。ね？」

はい決まり〜文句は言わせない〜、と深山さんは自己完結してさっさと古文の教科書を読み始めてしまった。

戸惑いながらもこれ以上は本当に口を開いても無駄だろうとこちらも自己完結の上、それはそれで一緒に昼を食べる事になるのだろうかという疑問に脳内は移行していた。

「さ、行く？」

四限の物理が終わった後、いつもならそれぞれ昼飯を取るのだが、

今日は肩を並べて教室を後にした。

何か後ろでざわざわとしていた気がするけれど、まあ、気のせいだろう。

教室から少し歩いたところで、深山さんが視線を俺の手元に向けた。

「……草間くん、お弁当は？」

「は？」

一緒に歩くというそれだけでなんとなく浮き足立っていた俺は、怪訝そうな声に意識を引き戻された。

そこで深山さんの言いたい事に気がついて、右の掌を意味もなく持ち上げる。

「あ、やっぱり持ってきた方がいいのかな？」

深山さんは少し考える素振りを見せつつ、答えは決まっていたのか小さく頷いた。

「態々呼び出すくらいだから……、一応持って行ったほうがいいんじゃないのかなあ。必要なければ、学食で食べてもいいしね」  
その言葉に俺は踵を返して、弁当を取りに行く。

それは、一緒に食べてもいいと言うことなのか。  
きつとそういう事なんだろう、うん。

なんとなく自分で自分の問いに答えつつ教室に入ると、ざわざわと  
していた教室が一瞬で静まり返った。

「？」

不思議そうに見遣ってくるクラスメイトを眺めつつ、そんな顔を  
したのはこちらなんだけれどと首を傾げながら弁当を取りに自分の  
席に歩いていった。

弁当の入った袋を手にとって顔を上げて、しんとした教室内の光  
景に変化はない。  
一体なんなんだ。  
そうぼやきながら歩き出すと、目の端に石井の姿が映る。

なぜか、親指を立てて片目を瞑っていた。

なんだ？ ゲツジヨブ？

何を口ばくでいわんとしているのか、全く分からん。

この状況だけでも意味が分からなくてもややもやするのにな、お前まで  
変な意思表示をしてくるんじゃない。

八つ当たり気味に石井の頭を叩いて廊下に出ると、教室内に喧騒が  
戻った。

どよめきと、言ってもいいくらいの騒がしさ。

……俺、何かやったのか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3061t/>

---

一枚の楽譜

2011年9月18日12時50分発行